研究成果報告書 科学研究費助成事業

今和 2 年 6 月 1 7 日現在

機関番号: 33901

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2016~2019

課題番号: 16 K 0 3 4 2 5

研究課題名(和文)民事保全手続の紛争解決機能 - グローバル社会に対応するための解釈論の提示 -

研究課題名(英文)The Function and Significance of Interlocutory Injunctuons

研究代表者

吉垣 実 (YOSHIGAKI, Minoru)

愛知大学・法学部・教授

研究者番号:60340585

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2.600.000円

研究成果の概要(和文): 仮の地位を定める仮処分の審理の在り方については、本案訴訟に進むことを予定している仮処分と、本案訴訟に進むことを予定していない仮処分を分けて検討する必要がある。後者の場合、被保全権利の審理が重視される。仮処分の本案代替化の事案においては、仮処分決定が本案訴訟の終局判決と同程度の内密性を有するがゆえに、保全の必要性の要件の審理が後退し、仮処分決定で紛争の終局的解決が図られ、本案訴訟に進むことが意味をなくす。制度としての仮処分と本案訴訟の関係が変容している。前者の場合、保全の必要性の審理を重視する必要がある。緊急性がある場合には、被保全権利の疎明が十分でなくとも、仮処分を発 令する必要があろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義 仮の地位を定める仮処分において、発令の実体的要件である被保全権利と保全の必要性の間に相関関係を認め、そのうえで比較衡量を行うことにより、仮処分の紛争解決機能は高まるものと考えられる。 私見によると、紛争類型のかなりの部分について、保全命令の発令が可能となる。また、仮の地位を定める仮処 分における訴訟上の和解の促進にもつながるように思われる。

研究成果の概要(英文): In the interlocutory injunction, flexible proceedings are conducted in accordance with the type of case, but there is also a need to refer to Japanese practices. Article 13(1) of Japan's Civil Provisional Remedies Act stipulates, "A petition for an order for a provisional remedy must clarify the purpose thereof and the rights or relationship of rights that must be preserved and the necessity of preserving it", and Article 13 (2) stipulates, "A prima facie case must be made to show the rights or relationship of rights that must be preserved and the necessity of preserving it "

Court practices rigorously examine (1) the rights or relationships of rights that must be preserved and (2) the necessity of preservation in each individual case, and do not allow for a correlative relationship between (1) and (2), but do allow for the possibility of an order of provisional disposition that determines a provisional status through flexible proceedings similar to an interlocutory injunction.

研究分野: 民事訴訟法

キーワード: 民事保全法 仮の地位を定める仮処分 満足的仮処分 インジャンクション 中間的差止命令手続 本案勝訴可能性 回復不能の被害 比較衡量

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等に ついては、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様 式 C-19、F-19-1、Z-19(共通)

1.研究開始当初の背景

近時、会社関係・経済関係をめぐる紛争の処理を図るために、仮処分等の民事保全手続を用いて法的救済を求める事例が顕著に見受けられる。大型企業統治紛争に関する事例や、上場企業の新株発行・新株予約権発行差止め仮処分事例など、社会的にも注目を浴びた事件が目立っている。これらの事案は、緊急性の高い場合が多く、主として時間的制約との関係から本案訴訟ではなく、仮の地位を定める仮処分手続に法的救済の場を求める必要性が要請されるという事情がある。また申立ての対象となる仮処分のほとんどが満足的仮処分であり、仮処分の本案代替化といわれる現象が生じている代表分野の一つであるといえる。そこでは、仮処分決定をもって紛争が解決されることから、仮処分の紛争解決機能が重要な意味を持っている。

本研究は、現行の民事保全法の解釈論として、仮処分の紛争解決機能を検討することを目的としている。グローバル社会に対応できる解釈論を提示したい。

2.研究の目的

わが国の仮処分に類似しているといわれるアメリカの中間的差止命令(interlocutory injunction)における手続を参考にしながら検討を進めたい。中間的差止命令の発令要件の審査は、いくつかの連邦控訴裁判所において柔軟になされており、そこでの審査基準および審査方法を検討することは、仮の地位を定める仮処分の審理の在り方を考えるうえで有益である。先行研究および近時の裁判例をふまえ検討したい。

3.研究の方法

本研究課題の研究方法について、その具体的内容を簡潔に記入すること。

テーマおよび関連テーマについて、研究会および学会で報告し、論文を発表する方法をとって きた。また、海外の研究者との交流も重視し、テーマについて多角的に検討するようにした。

4. 研究成果

「アメリカ連邦裁判所における予備的差止命令と仮制止命令の発令手続(1)~(8) - わが国の仮処分命令手続への示唆」(愛大 201 号 (2014 年) 29 頁以下、202 号 (2015 年) 39 頁以下、203 号 (2015 年) 1 頁以下、204 号 (2015 年) 49 頁以下、205 号 (2016 年) 85 頁以下、209 号 (2016 年) 53 頁以下、210 号 (2017 年) 1 頁以下、216 号 (2018 年) 145 頁以下)を発表した。これは本研究の予備的研究にあたるものである。

そこで得られた成果をふまえ、「仮の地位を定める仮処分における保全の必要性の審理について アメリカ中間的差止命令の発令要件の相関関係と審査基準からの示唆 」(『民事手続法の発展』加藤哲夫先生古希祝賀論文集 成文堂 三木浩一、山本和彦ほか編 325-344頁)を発表させて頂いた。

上記論文の一部およびデラウエア州衡平法裁判所の実務を整理し、第 16 回世界訴訟法会議 (2019・11・2~5)の「第 5 セッション (Open Call for Papers)」において報告させて頂いた。テーマは、The Function and Significance of Interlocutory Injunctions in the United States Implications for Japan's Order of Provisional Disposition であり、その中で、比較衡量は被保全権利と保全の必要性のほかに要求されるべきであるとの指摘をした。報告要旨は以下のとおりである。

The key point of my report is to examine the processing of provisional dispositions in Japan (Article 23 of the Civil Provisional Remedies Act) that specify a provisional status while referring to the practices of the procedure for the issuance of interlocutory injunctions in the United States (FRCP65).

In terms of how the requirements for the issuance of an interlocutory injunction are reviewed, some federal courts of appeal render rulings using a sliding scale, a method of judgment that allows a correlation where strongly demonstrating one requirement for all of the injunction requirements lessens the necessity of proof for the others.

These are Japanese provisions. The substantive requirement of an order for provisional remedy is the existence of the "rights to be preserved" and the "necessity of preserving them" (Article 13, paragraph (1)), and both require prima facie showing

(paragraph (2)). Judicial precedents in Japan tend to discriminate between the two and strictly examine each one separately. The focus is on the "rights to be preserved", but in some cases, the "necessity of preserving them " may be emphasized.

In the Winter v. Natural Resources Defense Council case, the Supreme Court stated the standard for issuing a preliminary injunction. It can be interpreted that the four requirements must each be demonstrated. The Supreme Court upheld that the Ninth Circuit Appeal Court's ruling in the appeal that a preliminary injunction could be recognized based only on the possibility of damage if the plaintiff had a strong likelihood of prevailing on the merits was too lenient, and stated the plaintiff had to demonstrate that irreparable harm was likely in the absence of an injunction.

Some believe that the Winter case rejected the sliding scale standard. However, Justice Ginsburg, in her dissenting opinion in the Winter case, stated that the court had never rejected the sliding scale standard. Even looking at the 2nd, 7th, 9th and 10th circuit courts following the judgment of the Winter case, it is apparent that the sliding scale standard has not been rejected.

I have conducted an analysis of the relationship between the four requirements that permit an interlocutory injunction. The plaintiff's irreparable harm is a component of comparative weighing and is also a prerequisite in order to be able to use the interlocutory injunction procedure. It can be said that comparative weighing is crucial. The key point is that after a preliminary injunction has been issued, the case rarely goes to trial.

Based on these points, let us consider the implications for Japan. If we are permitted to equate the possibility of succeeding on the merits with "preserving the rights" and irreparable harm with the "necessity for preservation", I believe that it is appropriate to recognize a correlation between the two requirements as in the United States. Furthermore, in Japan, the comparative weight of the obligee's interests and the obligor's damage is judged in the requirement of the "necessity for preservation". However, the comparable weight should be treated as a separate requirement from the rights to be protected and the necessity for preserving them. This concept has already been proposed in Japan. Judging from American practices, it can be said to be a valid concept.

The thinking described above is also useful for provisional dispositions that are not scheduled to proceed to litigation, that is, to resolve cases of so-called alternatives to provisional dispositions, or for settlements under the litigation laws for provisional dispositions that specify a provisional status.

セッション終了後、日本の先生方から、山本和彦教授の要因規範説を検討したうえで私見を論ずるべきとのご指導を賜った。早い時期に、検討させて頂きたい。

5 . 主な発表論文等

「雑誌論文〕 計5件(うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件)

「推秘論人」 計2件(フラ直説引論人 0件/フラ国际共省 0件/フラオーノファクセス 2件)	
1.著者名 吉垣実	4 . 巻 216号
2.論文標題 「アメリカ連邦における予備的差止命令と仮制止命令の発令手続-わが国の仮処分命令手続への示唆-」	5 . 発行年 2018年
3.雑誌名	6 . 最初と最後の頁
愛知大学法学部法経論集	145頁~222頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無
なし	無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著
1 . 著者名	4.巻
吉垣実	1
2.論文標題 Illegally obtained evidence in civil litigatio n: a comparative perspective 4.7 Japan	5 . 発行年 2018年
3.雑誌名	6 . 最初と最後の頁
La Pruba en el Proceso Evidence in the Process	175頁~197頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無
なし	無
オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	-
4 *************************************	4 Y'
1.著者名	4 . 巻
李鎬元(吉垣実訳)	214
2.論文標題	5 . 発行年
国際商事紛争の解決方法としての国際仲裁について	2018年
3.雑誌名 愛知大学『法経論集』 	6 . 最初と最後の頁 123頁 154頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無
なし	無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著
1.著者名 吉垣 実	4.巻 209
2 . 論文標題	5 . 発行年
アメリカ連邦裁判所における予備的差止命令と仮制止命令の発令手続(6) - わが国の仮処分命令手続への示唆 -	2016年
3.雑誌名	6.最初と最後の頁
愛知大学法学部法経論集	53-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無
なし	無
オープンアクセス オープンアクセスではない ▽はオープンアクセスが困難	国際共著

1 . 著者名	4.巻
吉垣 実	210
2 . 論文標題	5.発行年
アメリカ連邦裁判所における予備的差止命令と仮制止命令の発令手続(7) - わが国の仮処分命令手続への示唆 -	2017年
3. 雑誌名 愛知大学法学部法経論集	6.最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)	査読の有無
なし	無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1 . 発表者名

吉垣実

- 2 . 発表標題
 - 「アメリカ企業訴訟における中間的差止命令手続の機能」
- 3 . 学会等名

モンゴル国立大学主催「会社法制の見直しに関するシンポジウム」(国際学会)

4 . 発表年 2018年

1.発表者名

吉垣実

2 . 発表標題

確定判決の効力を受ける第三者の救済方法について

3 . 学会等名

日本民事訴訟法学会関西支部(2017年4月1日:島根ビル9階)

4.発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1.著者名 高田裕成、山本弘、松下淳一、山本克己、畑瑞穂、吉垣実	4 . 発行年 2018年			
2.出版社 有斐閣	5 . 総ページ数 1423 (うち、1091頁 1117頁を執 筆)			
3 . 書名 民事訴訟法の理論 高橋宏志先生古稀祝賀論文集「確定判決の効力を受ける第三者の救済について」				

1.著者名 松下淳一、加藤新太郎、吉垣実	4 . 発行年 2017年
2.出版社 日本評論社	5 . 総ページ数 452 (うち、342頁 353頁を執筆)
3.書名 基本法コンメンタール民事訴訟法2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

_

6 研究組織

υ,	・ W プロボロ PU		
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考